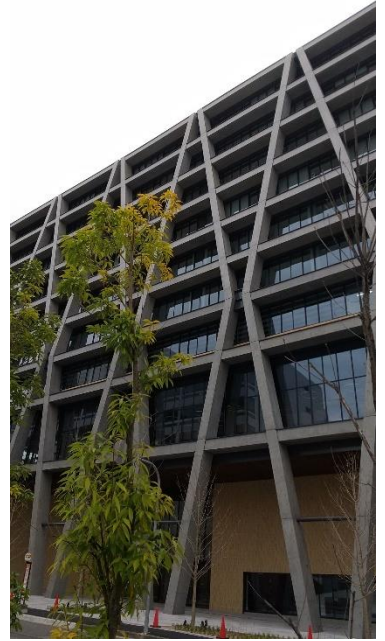


次の100年へ—箕面新キャンパスによせて

新しい酒を古い革袋に入れる。この言葉は、酒の風味を失う愚行という意味らしい。では新しい袋に古い酒を入れるとどうなるのか。新しい風味が産まれるのか、それとも伝統の味を失ってしまうのか。箕面新キャンパスは、これと同じような挑戦である。

箕面新キャンパスは、新しい容れ物と言うにふさわしい。10階建ての1階には、25言語の言葉を刻んだモニュメントや、瀟洒な大阪外国語大学記念ホール、大講義室があり、2階には広い事務室が配置される。3階は巨大なデッキとピロティで、2年後に延伸する予定の北大阪急行（御堂筋線）の駅と直結、市民も使える端麗なレストランやカフェが並ぶ。4階はダイキン工業株式会社様との未来の教室を創る共同研究の実験空間とされており、置換換気という革新的な空調システムを導入した講義室やアクティブ・ラーニングに特化した部屋、理想的な自習空間の創出を目指す部屋—SALCが作られる。5階には眺望のよい国際交流スペースが、6階との間にはユニークな階段状のプレゼンスペースが配置され、7階には留学生の集う日本語日本文化教育センターが、8階から10階には北摂の山を遥かにのぞむ研究室や共同研究室が入る。



だが建物は動かない。ことばに殉じて歴史を動かすのはあくまでも人間だ。人間がこの建物にどんな新しい可能性を見出すか。すべてがここにかかっている。ここに集う人間にとって、新たな社にはどんなポテンシャルがあるのか。まず、この場が繋いだ新たな市民との絆がある。そもそも大阪外国語大学は—もちろん大阪大学も—市民の力で創られた大学であった。箕面新キャンパスは、市民、とりわけ箕面の市民とともに歩いてゆく学舎だ。箕面の部局は、今一度建学の原点に立ち返って、未来への道を展望せねばなるまい。第2に、この新キャンパスは言葉を通じて、大阪大学を世界と結ぶ窓となるべき存在だ。外国語学部と言語文化研究科が100年にわたって培ってきた異文化を理解する言語のスキル。これを、大阪大学のすべての構成員に提供する努力を通じて、大阪大学を、世界の人々を結ぶ巨大な環の要に据える。これこそ「東方より光と平和を」という創立の理念を果たす道だ。



これは決して願望ではない。薔薇色の夢でもない。新キャンパスに足を踏み入れる者が背負うべき重い使命だ。酔いが冷めたら、兜の緒を締めよう。今まさに、次の100年の歩みが始まったのだから。

(岡田 新)